

アマノのひとこと コトバノツブ

「コトバノツブ」は、足助病院薬局前に設置された天野入華おすすめの文章を病院利用者様が自由に持ち帰ができる作品です。

「きみはいすれたびにでる
がいこくはわからないけれども
おとにみをまかせているときもちがいい
(中略)
たとえばアイルランドのさかばで
ぐうぜんぱつたりあえるかもしない
ふたごみことぼくごではなそう
そこではぼくたちのことばうつくしく
ふしぎながいこくごだ」

江国香織[詩集パンブルムース]から抜粋

発見!! 町中アート

Vol.014 気づいてみれば… テキスト:丸山直人

ペットボトルも入ってない。
まさに自動販売機としての本来の役目を放棄している?
普段見慣れている自動販売機が、ちょっとした変化でおもしろ可笑しく見えてくる。
こんな自動販売機では何の人の役にも立たないが、田舎道でボツンと一人佇む姿は、まるで自分の仕事を捨てて、一人さまよう世捨て人の風來坊のようにも見えてきて、なにか微笑ましくもあり、おもしろい。
これは想像の種になる、不思議な魅力を持っている自動販売機である。
周りを見渡してみたら、おもしろいものが意外と身近に沢山あるものだ。

早川院長の一匁

知れば知るほど生命の不思議
—美しい巧緻としたたかさ。
まさにアートだ!

やさしい美術からのおしらせ

取材を通して地域に暮らすことのすばらしさ、地域に病院が開かれていることの豊かさを感じ、その実感をどう誌面に表現するかがヤサビのイト編集部最大のテーマでした。本誌は平成19年11月から隔月で発行し、この14号をもって一度歩みをとめますが、やさしい美術プロジェクトの活動は続きます。偶然どこかで「やさしい美術」に出会った際、本誌を思い出していただければこの上ない幸せです。ご愛読ありがとうございました。

「ヤサビのイト」に携わって3年間、編集員が一丸となって1冊の情報誌を作り上げ、多くの方との出会いに繋がっていました。編集を通じ自分自身とも向き合うことができました。またどこかでお会いできるのを楽しみにしています。(張)

ヤサビのイト
合併号
編集後記



気づいてみれば…

テキスト:丸山直人



気づいてみれば、町にはくだらないけど、おもしろくて変なものがあふれている。
とある田舎へ遊びに行った時に偶然にもおもしろいものを発見。それは「サンブルも何も入っていない自動販売機!」
本来あるべきサンブルがないという不自然さ。
もちろん中には売り物の缶や



早川院長の一匁

知れば知るほど生命の不思議
—美しい巧緻としたたかさ。
まさにアートだ!

やさしい美術からのおしらせ

取材を通して地域に暮らすことのすばらしさ、地域に病院が開かれていることの豊かさを感じ、その実感をどう誌面に表現するかがヤサビのイト編集部最大のテーマでした。本誌は平成19年11月から隔月で発行し、この14号をもって一度歩みをとめますが、やさしい美術プロジェクトの活動は続きます。偶然どこかで「やさしい美術」に出会った際、本誌を思い出していただければこの上ない幸せです。ご愛読ありがとうございました。

「ヤサビのイト」に携わって3年間、編集員が一丸となって1冊の情報誌を作り上げ、多くの方との出会いに繋がっていました。編集を通じ自分自身とも向き合うことができました。またどこかでお会いできるのを楽しみにしています。(張)

ヤサビのイト
合併号
編集後記

発達センター
「ちよだ」での取り組みを紹介する「ちよだより」を連載するきっかけとなった号。

メンバーの取り組みに奮闘する姿や、子どもたちの様子を掲載するために編集員自ら、取り組みの企画や準備、実施に加わり、子どもたちとともに絵の具や泥だけになって取材しました。



2008年
9・10月号
2008年9月21日発行
P2・3「えがく」感性
「つむぐ」楽しさ



2008年
3月号 2008年3月16日発行
P2「ひととひと、そして二人は会った」
P6「みちのくぶらり足助旅(第3回)」「発見! 町中アート(第3回)」

取材によりより新鮮な情報を掲載することが可能になった2008年の3月号、足助周辺を歩き回り、様々な人々と出会い、文化や歴史に触れ「地域に寄り添う情報誌づくり」の基盤ができたものこの頃でした。今振り返ると取材や編集も不慣れな記事ですが、編集員はこの頃の気持ちを忘れぬよう制作しています。



創刊号

2007年11月18日発行

P2「よりやさしくなるために
～交流する美術と医療～」
P3「アイデアから作品、
病院設置へ」

ヤサビのイト 傑作選

2009年
11・12月号
2009年11月15日発行
P5「Ito Gallery」「アマノのひとこと」
P7「病院職員さんのオススメ(第13回)」「院内散歩」「早川院長の一匁」



前号では、本プロジェクトの活動や取材から「病院」や「地域」を通して患者さんや職員さん、地域の人たちが様々な人々・文化・暮らしと繋がっている様子を掲載しました。私たちの活動の原動力である「人との出会い」や「命の豊がり」を見つめる編集員の想いが溢れる記事となりました。

2009年 9・10月号 2009年9月20日発行
P2・3「人と人をつなぐ(後編)」



デザインやレイアウト、ロゴを再び大幅リニューアルした2009年9・10月号。内容も本プロジェクトが病院と地域、人々とのような繋がりをもって活動しているかをテーマに、より深く活動を理解してもらえるようシリーズの特集やアート・デザインに関するコラムの掲載に果敢に挑戦してきました。

2009年
1・2月号
2009年1月18日発行
P2・3「やさびの作品マップ」
—足助病院2009—



足助病院の展示作品を特集したこの号では、院内の地図を作成し、作品の展示場所を分かりやすく掲載することに奮闘しました。編集員が在籍していない時期に展示された過去の作品について情報を調べてまとめたり、編集を通して編集員が「やさしい美術」の歴史に直に触れる機会になりました。

足助の春夏秋冬

1年間を通して様々な行事が行われ、町の誇りとして伝え、守り続けられている足助地区。これまで「ヤサビのイト」で取材してきた行事を季節ごとにまとめました。(張)

冬

成木責

小正月の行事として、三州足助屋敷内の実なる木に対し行われる「成木責」。一人が木に対して「なるかなんか」と問うと、周りの人々が木に代わって「なるなる」と答えます。すると「なるかなんか」と問い合わせた人が幹のY字に分かれた枝の間に鉛で傷をつけ、別の一人が傷にあすき粥をつけて豊作を祈願します。

七草粥

毎年1月7日に行われる足助八幡宮での七草粥の振る舞いには、足助地区以外から多くの人が訪れます。人々はその年の健康を祈願して粥を食べます。

秋

足助祭り

足助八幡にて行われる足助祭りでは、4台の山車が繭かけ、「若連」と呼ばれる若者が山車の上で掛け声を上げながら踊るのが特徴です。祭りの終盤には年行司が山車の先端に取り付けられた梵天を投げ、人々は縁起物としてそれを取り合います。また、火縄錠を携えた鉄砲隊の錠の音が町中に響き、荒々しさと華やかさを持つ男たちの祭りを盛り上げます。

たんこりん

「たんこりん」とは、竹籠に和紙を巻いた行灯です。夏の夜に足助商店街では、軒先にたんこりんを置き、火をともして涼をとります。たんこりんに使用される和紙には、屋号のほかに詩や絵などが描かれ、様々な人々の想いが夏の夜に照らし出されています。

夏祭り「花火大会」

縁台で涼みをしたり、足助グラウンドより打ち上がる花火を眺める人々を見ていると、ゆったりとした足助の時間を満喫できます。

春

中馬のおひなさん

足助地区では、昔な祭りに子どもたちが「おひなさん見せて」とご近所の家々を訪ねて渡る風習があったそうです。現在では中馬街道周辺の民家や商店の軒先にひな人形を飾る「中馬のおひなさん」というイベントとして地域の人々に親しまれています。飾られるおひなさんは、江戸時代から現代のものまで幅広く、中には寝殿造りのものや、土でできたもの、手作りのものなどもあり、世代をこえて大切にされ、訪れた人を和ませています。